

黙示録 13 章の「666」の正体についての現実的な考察

まず始めにこのレポートのテーマをなす、「666」の部分を引用しておきましょう。

(啓示 13:15 - 18)「野獣の像をどうしても崇拜しない者たちをみな殺させるようにする…

全ての人の、その右手や額に印を受けさせ、また、その印、つまり野獣の名もしくはその名の数字を持つ者以外にはだれも売り買いできないようにする。

ここが知恵の関係してくるところである。そう明な者は野獣の数字を計算しなさい。それは人間の数字なのである。そして、その数字は六百六十六である。」

関連聖句：

(啓示 15:2)「野獣とその像とその名の数字から勝利を得る者たちが神のたて琴を持って、…」

(啓示 19:20)「野獣の前でしるしを行ない、それによって、野獣の印を受けた者とその像に崇拜をささげる者とを惑わした偽預言者…」

16 節の、しるしの付される「右手や額」ですが、それらは「腹や足」とは違い、常に表立って目立つ場所であり、秘密にはしておけない場所というような意味があるのかもしれませんが。

17 節の、押される刻印が、「野獣の名もしくはその名の数字」という表現にある、「もしくは」というのは「野獣の名」または「名の数字」のどちらか、という意味に取れますが、これは、「言い換えれば」「すなわち」という意味であろうという解説もあります。

また、黙示録 15:2 に「野獣とその像とその名の数字」と、3つ列挙されている表現からみても、刻印として、実際に記されるのは「名」ではなく、「名の数字」である可能性が高いようです。

しかし、この時代に、文字通り、消せない仕方で、(例えば「入れ墨のような」) 皮膚に直に施す事は、いくら強制力をもってしても、さすがに、抵抗は、大きすぎるでしょうから、現実には、非常に考えにくいと思います。

この「666」については実に多くの人が様々な予測を立てています。そして、かなり、有力な線として言われているのが、個人情報データを集積した小さな「マイクロチップ」を各人の皮膚下に埋込み、それをコンピュータで読み取る方法であろうとされています。

しかしこれも、先進国なら可能かも知れませんが、対象は全地の全人類です。大人も子供も含まれるでしょう。

今後、後進国とされる国々にどれくらい、コンピュータが浸透するかは分かりませんが、技術的な格差がある状況では、全人類にこうした方法を用いるのは、現実的に難しいでしょう。

さらにこれもまた、相当な抵抗が予想されます。

忘れてならないのは、それを受けさせるのは「偽預言者」であるということです。

(啓示 19:20)「野獣の前でしるしを行ない、それによって、野獣の印を受けた者とその像に崇拜をささげる者とを惑わした偽預言者…」

つまり、「印を受ける」ことは、生死に関わる強制力を伴っているとは言え、それは「惑わし」の一つであり、人々は、その野獣を信頼し、全面的に自分の将来を託せると、思い込めるという状況だと言うことです。

ですから、その刻印も、自ら「認めて、受ける」あるいは積極的に支持して受ける類のものですから、

「怪しまれる」方法や生理的に大きな抵抗を感じる方法が採られるとは考えにくく思えます。

恐らく、抵抗なく簡単に施せる何らかの方法が考案されるのかも知れません。

この点については、後でもう一度、現実的に考えられる可能性を、考慮します。

さて、「抵抗感がない」ということは、また、その実際の見え目や、各自の認識も、「自分は666という数字を刻印された」ということが明確になることも恐らくないだろうと思います。

実際、聖書を知らなくても、「666は悪魔の数字」といった話しは、映画や、マンガ、アニメなどのよくでてくるもので、知らない人の方が少ないでしょう。

ですから露骨に「666」という刻印であれば、やはり「なんか気持ち悪い」という拒否反応は相当なものだと予測できます。

さて、改めて、「666」というのは野獣の名の数字 とは何かを別の角度から見てみましょう。

口語訳： ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は六百六十六である。

塚本訳： ここに知恵が（蔵されて）ある。理知ある者は（この）獣の数をかぞえよ。それは人間の数である。（人の名である。）そして（その人の名を数うれば、）その数は六百六十六！

前田訳： ここに知恵がある。心あるものは獣の数をかぞえよ。それはひとりの人の数である。その数は六百六十六。

新共同： ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六である。

KJV with Strong's: Here is wisdom Let him that hath understanding count the number of the beast for it is the number of a man and his number is Six hundred threescore and six

「人間の（数字）」と訳されている部分は、ギリシャ語原文[アンスローポス]を確認しても分かりますが、英語では a man であり、1人の人（男）という意味です。

ですから、野獣の数字というのは、政府、国家などの組織名ではなく、1人の男の名前「の数字」ということになります。

この個人が誰かについて、ダニエルの預言を通して明らかになるのは、10本の角のうち、3本を引き抜いて、最後に出て来る、冒瀆的で大仰な事を語る口を持つ「小さな角」（1人の王）であるに違いありません。

ヨハネは、あえて「ここが知恵の関係してくるところである。そう明な者は野獣の数字を計算しなさい。」と述べています

ここで用いられている「計算」という語句は、ギリ語:[フセフィゾー]という語です。

(このギリシャ語は、他にもう一箇所、ルカ14:28に「費用を計算する」という記述の中で用いられています。)

名前は計算できないので、一つのとらえ方として、名前に関する何らかの数字要素を、例えば足し算などのような演算した結果が666になるということを示唆してると考えられます。

しかし、単にそれだけではないようにも思えます。その理由は、野獣を代表する人間の名は、固有名詞ですから、それらしい人間が現れたなら、その名前が666という数を表すかどうか確か

めてみる（計算する）ことはできますが、それまでは、どうしようもありません。

しかし、すでに現れてから、それが分かったところで、どれほどの意味があるでしょうか。

果たして、ヨハネは「そう明な者は野獣の数字を計算しなさい」という言葉を、それが現れたその時点で言うよう勧めたのでしょうか。

それとも、他の預言と同様、読者が、祈りの内に識別力を働かせて、聖書中の他の内容から、その意味する所を把握することを勧めているのでしょうか。

「ここに知恵が必要である」ということわりは、やはり、事前に「計算」し得る何らかの要素が、聖書中に秘められていると考えて良いのではないのでしょうか。

であれば、この場合の「計算」は文字通りの数式の演算ではなく、「知恵を働かせた思考を駆使する」ということかも知れません。

ということで、私なりにそれを試みてみたいと思います。

では、いよいよ、この「666」は誰なのかについてですが、まず、聖書中にこの数字が出て来るのは、この啓示13章以外に、次の3箇所（実質敵には2箇所）、ですが、エズラの記述の666は、バビロンの捕囚から帰還した時の、人々のリスト中の記録であり、これに付いての他の情報はありませので、ここでは却下します。

（エズラ 2:13）「アドニカムの子らは六百六十六人。」

（列王第一 10:14）「一年間にソロモンのところに入って来た金の重さは、金六百六十六タラントにもなった。」（歴代第2 9:13は平行記述で、同内容）

この他、6がらみで関連があるかも知れないと思えるのはネスカドネザルが立てた金の像の記述があります。

（ダニエル 3:1,6）…「王ネスカドネザルは金の像を作った。その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトであった。…だれにせよひれ伏して崇拜しない者は、即刻火の燃える炉に投げ込まれるであろう」

そして、もう一つ、特徴的に「6」の数字で彩られているのが「ゴリアテ」です。

（サムエル第二 21:20 - 21）「手に各々六本の指、足に各々六本の指、合計二十四本ある、異常な大きさの男がいた。」

（歴代第一 11:22 - 23）「ある勇敢な人の子、エホヤダの子で、カフツェエルで多くの手柄を立てたベナヤはモアスのアリエルの二人〔の子ら〕を討ち倒した。彼はまた、ある雪の降る日に、降りて行って、水のある坑の中でライオンを討ち倒した。また、五キュビトの、異常な大きさの男であるエジプト人を討ち倒したのは彼であった。そして、そのエジプト人の手には機織り工の巻き棒のような槍があったが、それでも彼は杖を携えてその男のところまで下りて行き、エジプト人の手から槍をもぎ取って、その槍で彼を殺した」

（サムエル第一 17:4 - 7）「ときに、ひとりの代表闘士がフィリスティア人の陣営から出て来たが、その名をゴリアテといい、ガトの出身で、その丈は六キュビトと一指当たりであった。また、その槍の刃は鉄で六百シェケルあった。」

フィリスティア人はダビデに言った、「わたしは犬なのか。お前は杖を持ってわたしに向かって来るが」。そうしてフィリスティア人はその神々によってダビデの上に災いを呼び求めた。」

(サムエル第一 17:36)「わたしは獅子も熊も倒してきたのですから、あの無割礼のペリシテ人もそれらの獣の一匹のようにしてみせましょう。彼は生ける神の戦列に挑戦したのですから。」

(サムエル第一 17:46 - 47)「わたしは必ずフィリスティア人の陣営の死がいをおこの日、天の鳥や地の野獣にくれてやる。全地の人々はイスラエルに神がおられることを知るであろう。そして、この全会衆は、エホバが剣や槍で救うのではないことを知るであろう」

これら、ゴリアテに関するこれらの記述には、黙示録 13 章と興味深い関連が読み取れます。簡単にまとめますと、次のようになります。

ゴリアテの特徴： 神を嘲弄する。 戦いを挑む。 むやみに 6 がつきまとっている
 ダビデの特徴： 杖を持って立ち向かう。 ゴリアテを獣の 1 匹のようにみなす。
 剣によらず打ち倒す。その死骸を鳥に与える。

特に、17:36にある「ライオンも熊も…獣の一匹のように」という表現と、ダニエル4章の「4頭の獣」の記述を比較すると、第1-ライオン、第2-熊、第3-ヒョウ、第4-恐ろしい獣とあって、「ゴリアテをヒョウのような獣の一匹とみなす」という解釈を立てると、ゴリアテはギリシャ帝国を表すと捉えることが可能になります。

それで、実際、ペリシテ人について、調べると、興味深い事実が分かってきました。

次の文は、辞典からの引用です。

ペリシテ人（フィリスティア人）は紀元前13世紀から紀元前12世紀にかけて地中海東部地域に來襲した「海の民」と呼ばれる諸集団を構成した人々の一部であり、エーゲ海域とギリシアのミケーネ文明を担った人々に起源を持つとする説が有力である。

古代カナン南部の地中海沿岸地域周辺に入植した民族群。アシュドド、アシュケロン、エクロン、ガザ、ガトの5つの自治都市に定着して五市連合を形成していた。

彼らのルーツはハムの子ミツライム（エジプト）の子であるカフトルの子孫であるとされ、「カフトル島から来たカフトル人」と呼ばれている（『創世記』10:13-14、『申命記』2:23）。さらにこれを裏付ける記述は、『エレミヤ書』47章4節にも存在する。

カフトルが実際にどの地域を指しているのかについても諸説あるが、紀元前12世紀頃までに、すでに鉄の精製技術を有していたことなどから、クレタ島、キプロス島、あるいはアナトリア地方の小島の1つであった、などの候補が挙げられている。今日ではクレタ島であるとの見解が示されることが多い。

前4世紀後半、アレクサンドロス大王に攻略され、ペリシテ人としては、以後史上から消え、ギリシャ帝国に併合される。

従って、ゴリアテの出身地は、シリア出身の「アンティオコス・エピファネスと同じギリシャ帝国であり、「北の王」である終末期の「小さな角」と同様であることが分かります。

さらには、ペリシテ人は古くから鉄を用いることでよく知られた民族でした。

「小さな角」も「鉄の脚」で表されるローマ帝国の終末期にいる10人の王からなる復活ローマを言えば乗っ取って、その力を利用するものであり、ゴリアテが、600シェケルもの（7kg近い重さ）を用いている様子と重ね合わせることができるように思えます。

ゴリアテ対ダビデ のこのシーンと 良く似ている 野獣対キリスト に関する黙示録の記述を比較してみました。

(啓示 13:1)「わたしは一匹の野獣が海から上って行くのを見た。十本の角と七つの頭があり、その角の上には十の王冠があつたが、その頭には冒とく的な名があつた。」

(啓示 13:5-6)「大いなることや冒とく的なことを語る口がそれに与えられ、また、四十二か月のあいだ行動する権威が与えられた。そして、それは口を開いて神を冒とくした」

野獣の特徴： 神を冒瀆し。 戦いを挑む。 666

(啓示 19:19-21)「そしてわたしは、野獣と地の王たちとその軍勢が、馬に乗っている方とその軍勢に対して戦いをするために集まっているのを見た。そして、野獣は捕らえられ、・・・彼らは両方とも生きてまま、硫黄で燃える火の湖に投げ込まれた。しかし、そのほかの者たちは、馬に乗っている者の長い剣で殺された。そして、すべての鳥は、彼らの肉を食べて満ち足りた。」

キリストの裁きの特徴：「鉄の杖」を持ち。 野獣を捕らえ、生きてままゲヘナに投げ込む。

(その他のものは「剣」で殺された)。 すべての鳥は彼らの肉を食べた。

ネフカドネザルの金の像に関する記述と、黙示録13章の比較

金の像の特徴： 高さ60、巾6 崇拝しない者を火に投げ込む

野獣の像の特徴： 666 崇拝しないものを「みな殺させるようにする」

ソロモンの金貨に関する記述と、黙示録13章の比較

ソロモンの金貨： 主にエジプトからの金 666タラント

野獣の特徴： 666 売り買いを禁ずる。「北の王」の並外れた経済力

(ダニエル 11:43)「彼は隠された金銀の宝をまさに支配し、またエジプトのすべての望ましい物を支配する。」

ここで、冒頭に述べた、「怪しまれない刻印」とはどんなものかに関する私の考察(推察)を述べておきます。

ここで思いに留めておきたい点は、「北の王」つまり野獣の「小さな角」の大きな特徴は、前述の膨大な経済力に加えて、狡猾さ、巧妙さを併せ持つ者であることがわかります。

(ダニエル 11:32)「滑らかな言葉」

(ダニエル 8:23)「あいまいな言い回しをよく理解する」

(ダニエル 8:25)「その洞察力によって欺き事を必ずその手中で成功させる」

その持ち前の巧妙さと悪知恵で、それまで何世紀もの間、誰にも解決できなかった、(例えばパレスチナ問題とか) 様々な問題を、解決すると人々に信じさせるに足る、知恵を示し、それこそ、

神からの知恵と自他共に認めるという事になるのでしょうか。

その者の像が造られ、崇拜を強要し、刻印を押し、売り買いができないようにする。これが666の正体です。

そして、そのものの目指すものは、世界統一国家ですから、恐らく、流れとしては、10各国の連合国として再興隆した（ローマは死んでないので「復活」ではない）ローマ帝国が、たぶん第三次世界大戦で、「剣の一撃を受けた」あと、その中の3カ国を除いて、リーダーとして「小さな角」（シリアの王アンティオコス・エピファネスの現代版）が、かつてのギリシャ帝国の領土から出沒するに及んで、（この時は「死んだ」と思われていたので、「復活」して）、全地から驚嘆の目で見られ、世界政府としての歩みを始めようとするのでしょうか。そして、急速にその計画が進められる中、求心的な目的を果たすために、その「像」が作られ、崇拜を推し進めるのでしょうか。

（啓示 13:14）「剣の一撃を受けながら生き返った野獣のために像を作るようにと地に住む者たちに言う。」

この表現から分かるのは、一つの像ではなく、いたるところに、作らされるようです。

そして、それに「息」が与えられ、崇拜しない者を「殺させる」と言うことです。

殺すのは誰なのでしょう。野獣でも、偽預言者でもありません。主語は省かれています。「像」が殺すのでしょうか。

さて、ここまでで、全てのヒントは出そろいました。

結論です。

この「像」と「刻印」は同じものであろうと思われまます。

そして、その実体は、世界統一国家の誕生を記念するものとして、そして、国家としての機能を果たすもの、他国を牛耳るもの、つまり「世界通貨」に違いありません。そして、世界経済も、その時までにはすでに、全体的に破綻同様の状態にあるかも知れません。

聖書から見いだされる「666についての情報」は、端的に言って、「金」「タラント」つまり当時の通貨であり、「売り買いする」ためのものです。

そして、「野獣の名の数字」という「数字」は単なる数字という意味ではなく「通貨」を表す、預言的比喩かもしれません。

金貨にはほとんど、その国の象徴となる人物のレリーフと名前そして数字が刻印されています。

現在、金融や経済の破綻などの問題点などから、紙のお金、紙幣の利便性を見直すべきだという論議が持ち上がっていますが、再び、「金貨」が復活することも十分考えられます。

それで、各国は、それまでの自国の通貨に替えて、新世界通貨を作ることを余儀なくされ、野獣と偽預言者によって認可されることにより「息」を与えられ、それまでの通貨は、その新通貨に換金する必要があるでしょう。あるいはその両替の際に何らかの崇拜行為が求められるかもしれません。

いずれにせよ、通貨であれば、それを用いるのに、怪しむ人はいないでしょう。

刻印を受けていない者は誰も「売り買い」できないようにする。ということは、その所持や使用に何らかの崇拜が要求されるシステムが導入される。それが「息」を与えるということでしょう。

そして、その通貨、金貨あるいは紙幣には、666に関わる「名」が、そして、「計算すると」

666になる、何らかの「数字」が文字通り刻印されているかもしれません。

しかしむしろ、666は、「金」であり、人間の経済活動の象徴であり、そして、通常、紙幣に見られる、その発行者の代表となる名と肖像が刷り込まれているものと捉えることができます。

もし、「名の数字」という者が文字通りだとしたら、その1人の男の名を古代の方法と同じ方法で、計算できるかもしれません。

ギリシャ語は、ヘスライ語と同じで、古代において、アルファベットの文字で数字を表していました。

終末期の野獣の（代表者の）名前の綴りを、数字に置き換えて計算すると666という合計が出るということかもしれません。

試しに、「荒廃をもたらす嫌悪すべき者」の現代版として、終末期に登場すると言われている、かつての「エピファネス」の名を計算してみました。

（別 図を参照）

そこに出た数字は660でした。

単なる偶然かもしれませんが、偶然にしては、ちょっと「出来過ぎ」と思える程、近い数字です。もし、これが、偶然ではなく、意図されたものだとしたら、最終的「荒廃者」はさらに上に行く、完璧なサタンの成り代わりとして、言わば完成された、反キリストとなるもので、「不法の人」「滅びの子」として最適な名とその666という数字を帯びるのではないかと考えられます。

アンティオコス4世 エピファネス επιφανής

アンティオコスは1世から13世までセレウコス朝の君主であった。

その第4代目の固有名が「エピファネス」である。

イオニア式数字(ギリシア数字)

文字	ヨミ	数値	文字	ヨミ	数値	文字	ヨミ	数値
Α´ α´	アルファ	1	Ι´ ι´	イオタ	10	Ρ´ ρ´	ロー	100
Β´ β´	ベータ	2	Κ´ κ´	カッパ	20	Σ´ σ´	シグマ	200
Γ´ γ´	ガンマ	3	Λ´ λ´	ラムダ	30	Τ´ τ´	タウ	300
Δ´ δ´	デルタ	4	Μ´ μ´	ミュー	40	Υ´ υ´	ウプシロン	400
Ε´ ε´	イプシロン	5	Ν´ ν´	ニュー	50	Φ´ φ´	ファイ	500
Ϛ´ ϛ´	スティグマ	6	Ξ´ ξ´	グザイ	60	Χ´ χ´	カイ	600
Ζ´ ζ´	ゼータ	7	Ο´ ο´	オミクロン	70	Ψ´ ψ´	プサイ	700
Η´ η´	イータ	8	Π´ π´	パイ	80	Ω´ ω´	オメガ	800
Θ´ θ´	シータ	9	Ϙ´ ϙ´	コッパ	90	Ϡ´ ϡ´	サンピ	900

Επιφανής

$$5 + 80 + 10 + 500 + 1 + 50 + 8 + 6 = 660$$